

解放後、韓国知識人の歩み—安秉直氏に聞く（上）

今 西 一

は し が き

今日、日韓の「歴史認識」の溝は、ますます深くなりつつある。2015年4月7日の『朝日新聞』によると、4月6日、検定基準が変わって初めての検定結果を文部科学省は発表した。そこでは16年から使われる中学校の歴史教科書で、学び舎のものは、「旧日本軍の慰安婦にされていたと名乗り出た金学順キムハクスンさんについてや、元慰安婦が謝罪や補償を求めたことなどをめぐる記述」は、07年に閣議決定に基づく「軍による強制連行を直接示す資料は見当たらない」という政府見解と異なるとして、一度は不合格にされた。そこで学び舎は、「元慰安婦が連れられる図や証言の記述を削除し、「強制連行を直接示す資料が見当たらない」との政府見解を追記」して検定を通過させた。それでも「慰安婦」について中学校の教科書で記述が載るのは10年ぶりのことである。

政府は1993年のいわゆる「河野談話」で、「慰安所は、当時の軍当局の要請により設営されたものであり、慰安所の設営、管理及び慰安婦の移送については、旧日本軍が直接あるいは間接にこれに関与した。慰安婦の募集については、軍の要請を受けた業者が主としてこれに当たったが、その場合も、甘言、弾圧による等、本人たちの意思に反して集められた事例が数多くあり、更に、官憲等が直接これに荷担したこともあったことが明らかになった。また、慰安所における生活は、強制的な状況の下での痛ましいものであった」と述べている。この文章は、外務省のホームページに掲載されている。

しかも「河野談話」は、「われわれは、歴史研究、歴史教育を通じて、このような問題を永く記憶にとどめ、同じ過ちを決して繰り返さないという固い決意を改めて表明する」と結んでいる。ところが、現在の小中学校の歴史教科書には「慰安婦」の記述はなく、10年ぶりに書いた学び舎の教科書も、「強制はなかった」という注記を付けて掲載を認めている。高校の教科書でも、「慰安婦」の記述は減少傾向にあり、山川出版の『高校日本史B』、清水書院の『日本史B』、明成社の『最新日本史』などには「慰安婦」の記述がない。このような傾向は、今後の日本史教科書の検定のなかで、ますます増えていくであろう。

ここでインタビューをお願いした^{アンピョンジク}安秉直氏*は、私の旧い知人であるが、日本のメディアでは、「『従軍慰安婦』を否定する、韓国ソウル大学の名誉教授」としてよく紹介される人物である。

近年も『週刊文春』の2014年4月10日号に、ジャーナリストの大高未貴氏が書いた、「慰安婦『調査担当』韓国人教授が全面自供！」という記事が掲載されている。これは、安氏が90年代の初頭に挺対協(韓国挺身隊問題対策協議会)とともに「慰安婦」19名の聞き取り調査を行ったが、その証言集(日本語版『証言—強制連行朝鮮人軍慰安婦たち』明石書房、1993年)は、韓国の反日プロパガンダの「バイブル」として使われてきたが、安氏は「19人の慰安婦の証言の信憑性について、実質的な『調査失敗』を認めた」とする。そして、「河野談話は、安氏らが調査した慰安婦の中でも証言が曖昧だとして切り捨てられた面々の証言をベースに作成されたものだと思われる」と断定して、安氏から「信憑性に欠ける聞き取り調査をもとに発表された河野談話はおかしい」という証言を引き出したとしている(26頁)。しかし、この大高氏の記事が、いかにインチキであるかは、京都大学の堀和生氏を通して送られてきた、安氏の次の「反駁文」を読めばわかる。

反駁文

安秉直(ソウル大学名誉教授)

『週刊文春』4月10日号(2014年)に掲載された「慰安婦『調査担当』韓

国人教授が全面自供」という記事は、ジャーナリストの大高未貴氏が私の発言を歪曲して自分が書きたいことを書いたものに過ぎません。

まず、この記事が書かれた背景からお話しします。さる1月16日、大高氏がある韓国人を介して執拗に面談を要請してきました。それでやむを得ず、「報道しない」ことを前提に会って話をしたことがあります。その時の私的な会話がこの記事の基礎資料になっているようです。同じ頃、『週刊文春』からも二度にわたって面談の要請がありましたが、それはすべて拒絶しました。ですからこの二つの面談要請がどのような関係にあるのか、私としてはまったくわかりません。

次に、私の発言に対する歪曲の事例を挙げます。1. 記事では『証言集一』に出てくる元日本軍慰安婦19名を、私がすべて面談調査したと書いていますが、私はその人々に対する調査資料の検討に全面的に関与はしたけれども、全員と面談調査したことがあると言ったことはありません。2. 『証言集一』の調査の際、元日本軍慰安婦かどうかを確認するのが大変だったこと、そしていま再検討してみると、1名は軍慰安婦ではなかったようだと言ったことはありますが、その調査の「実質的な調査失敗」を言及したことは全くありません。3. 河野談話は日本軍慰安婦に対する既存の研究と若干の軍慰安婦に対する事例調査に基づくものなので、日本軍慰安婦の存在を全面的に否定できない限り、事例調査に多少不明確な点があるからといって河野談話を否定することは日本にとって得策ではないと何度も忠告したが、大高氏は私がまるで「河野談話はおかしい」と言ったかのように事実を歪曲しました。事実の歪曲はこれ以外にもたくさんありますが、この程度にとどめておきます。

そして、その日は日本軍慰安婦問題の本質についても多くの話をしました。これまでの研究に基づいて、その日私が提示した日本軍慰安婦問題の本質は次の通りです。「日本軍慰安婦問題の本質は、上海事変（1932）から太平洋戦争（1941～45）に至るまで、日本政府が日本帝国及び日本軍の占領地で多くの若い女性たちを徴集し、日本軍の後方施設である慰安所に留置して将兵たちの性的欲求を処理するための兵站として使用したことである」

2014年4月9日

何より安氏は、2013年に公刊した『日本軍慰安所管理人の日記』（出版社イ
スプ）の「資料解題」のなかで、「慰安所と慰安婦が日本軍の最下部組織であっ
た」という永井和氏の見解に賛同し（同『日中戦争から世界戦争へ』第5章、
思文閣出版、2007年）、「慰安婦」を「『性的奴隷状態』と捉えても差し支えない」、
と断言している（日本語訳、181頁）。『日記』の日本語は堀和生、木村幹氏の
手によって行われており、^{ナクソンデ}落星台経済研究所のホームページで読むことができ
る（<http://www.naksung.re.kr/xe/sepate>）。この「資料解題」を読むだけでも、
大高氏の記事がいかにインチキなものであるかが理解できる。ここで安氏も指
摘しているように、従来の「慰安婦」研究では、文献資料が決定的に不足して
おり、この『日記』の発見と公刊は実に貴重な仕事である。

また安氏は、代表的な「植民地近代化」論の論者として有名であるが、この
インタビューを読んでいただければ、その思想的な背景というものが理解でき
るであろう。「解放」前の朝鮮の生活、朝鮮戦争（韓国では「韓国戦争」と呼ぶ）、
戦後の混乱からソウル大学での日々、マルクス経済学・経済史の研究からその
離脱など、韓国の知識人の苦悩が赤裸々に語られている。さすがに尊敬する友
人の中村哲氏は、「私がマルクス主義から離れていったことに、批判をもって
いるのでしょうか」と私に言われた一言は、印象的であった。「植民地近代化」
論者とと言われることで安氏を批判する人もいるが、ソウル大学の経済学部や落
星台経済研究所で多くの優秀な弟子を育て、日本からの留学生にも実に親切に
接してこられた業績は貴重である。私も韓国留学中は、ソウル大学の調査で、
安氏や^{キムヨンドク}金容徳氏に大変お世話になり、貴重な文献を見ることができた。とても
その学恩には報いていないが、安氏の本音を、少しでも日本の読者に伝えたい
と思って、このインタビューを公開することにした。

なお安氏へのインタビューは、2014年2月、大韓民国京畿道果川市において
行われた。聞き手は今西一（大阪大学招へい教授、小樽商科大学名誉教授）、
石川亮太（立命館大学教授）、水谷清佳（東京成徳大学准教授）の3名が、テー
プの原稿起こしは徳間一芽（広島大学院生）が担当した。本文では発話者の特
徴を生かすよう心掛けたが、一部、話者の意図、趣旨から逸脱しない範囲で日

本語を読みやすく修正を施した。また、説明が必要と思われる箇所については（ ）を付して補足した。なお、本インタビューについては、2015年11月刊行の『ARENA』第18号に既に掲載されているが、いくつかの事実と異なる箇所および構成ミスが発見されたため、ご本人より間違いを訂正、補足していただいた。安氏にはこの件で多大なご迷惑をお掛けしたことを心よりお詫び申し上げます。

1. 『日本軍慰安所管理人の日記』と軍慰安所

1.1 導入

安 今度、「慰安婦」（以下、「 」は省略）問題についてご研究なさるという話ですが。

今西 慰安婦のことだけでなく、先生のお話もちょっと伺いたいと思っております。

安 どうして朝鮮人慰安婦が、割合そんなに多かったか。それを私もちょっと考えたんですけどね。やっぱりこれ（今西一編『北東アジアのコリアン・ディアスポラ』小樽商科大学出版会、2012年を指しつつ）と関係あるんじゃないかな、という感じがしてましてね。

石川 海外移住が多いってことですよね。

安 だいたい中国と台湾と、移住民の比率を見ますとね、割合、朝鮮人の移民率が高いんですね。その人たちは、大体移動した人間だったんです。そこから慰安婦たちがたくさん出てきたかな、という感じです。それと、韓国の中

* 1936年、大韓民国慶尚南道咸安郡生まれ。62年ソウル大学商学部経済学科卒、64年ソウル大学大学院にて経済学修士号取得。65年からソウル大学商学部教授を務め86学年度に東京大学経済学部の教授を務める。87年には落星台経済研究所の創設に関わる。1989年から99年までソウル大学経済研究所長、2001年に退職。02年福井県立大学大学院特任教授を務める。日本語で書かれた著書として『近代朝鮮工業化の研究』（中村哲・安秉直編、日本評論社、1993年）、『日本資本主義と朝鮮・台湾』（堀和生・中村哲編、京都大学出版会、2004年）など。その他著作多数。

でも農村からね、活発に都市に向かって移住する人が多かったんです。それにね、都市にも人間が多かったですから。それが、割合朝鮮人の慰安婦の比率が相対的に高かったという、その原因の一つになるかな、と感じられたんですね。

1.2 韓国挺身隊問題対策協議会について

今西 安先生が慰安所の資料を見つけて、活字（邦題では『日本軍慰安所管理人の日記』。以下『日記』と略記）にされましたでしょ。90年代から慰安婦のことをやっておられましたよね。

安 ええ、韓国には挺対協（挺身隊問題対策協議会の略称）というのがありますね。その姉妹団体として「挺身隊研究会」というのがあります。そこで女性たちが集まっていたんですけども、私は植民地期、1930年代が専門ですから、ちょっと手伝わないとダメかなと思ってね。私、その変な義務感がありますから。それで私、一緒にその元慰安婦の調査に参加しまして。1年か1年半くらい頑張ったんです。それをどうして途中でやめたかといいますと、その理由は二つあります。一つは何かというとね、挺対協では挺身隊と慰安婦を区別しないんです。だから、私が思うにそれはもう正しい研究姿勢ではないから。研究者は事実を確認しないで、それをあいまいにしたらダメだと。だから僕「これはダメですよ」と言ったんです。もう一つは何かといいますと、調査というのはね、元慰安婦の女性を調査するものなんですけど、ここはね、誰でも率直に打ち明けられるところじゃないんです。そうですから、これ率直な証言を取ることが非常に難しい所がある。事実を追及することが非常に難しい。だから一回でもね、本当のことを語って、整理する。これでいいんじゃないかと。私はそのように思ったんですよ。だけどね、その人たちはみんなもう、反日運動としてそれやっています。だから、これではいけないと思ったんです。調査の結果反日運動に繋がることはやむを得ないことかもしれませんが、反日運動を目的にやること。これは非常に辛いところですね。ただこれをもって反日運動をやると。これはダメじゃな

いかと。途中で挺対協から抜けた一つの理由として。

1.3 『日記』の翻訳と著作権

今西 『日記』は今、堀和生さんたちが訳しているんですよ。今度の本は日本語訳を出すということです。

安 いやいや、すでに翻訳されました。翻訳されてね、出版しようと思ったんですけど。

今西 出版がまだなんですか。

安 向こうがね、「著作権がないと、日本では出版ができないんです」って、言ってる。堀さんがね。それは日本の事情ですから。

石川 著作権というのは、「著者の」ということですか。

安 あの本、著作権者がいないんです。その著者がね、亡くなったんです。

今西 ああ、生きておられないんですね。

安 だけど、その遺族が残ってるでしょ。その人が亡くなってから、50年経たないとね、著作権、（それまでは）その遺族に、あるんですよ。だけどね、そんな本を出版しましょうと言って、その人たちに、交渉することは色んな事情で難しいでしょ。もちろん、聞かなかつたら無礼だと。だけど、資料として出さなければならぬんですから。（だから後で印税を）返そうと思って、出している。私の責任でね。その代わり印税を、私が貰うんじゃなくて、その人のために預かっておくと。だから、その遺族が現れてね、「その著作権、我々にありますよ」と言ったら、「これ受け取ってください」と言って渡そうと。そうすればいいんじゃないかな、と。これ、私の勝手な判断ですよ（笑）。これが法律的にどんな意味があるかそれは分かんない。そんな本は、日本では（出せないですから）。

今西 だけど、もったいないですよ。どこか学術雑誌でも発表してくれたらいいんですけどね。雑誌か何か、大学の紀要とかそういうとこね。営利目的じゃなく翻訳を載せれば、いいと思うんですけどね。

安 それ、素晴らしい発想じゃない。翻訳権は、二人（堀和生、木村幹両氏）

が持ってますから。今は落星台研究所のホームページ (<http://www.naksung.re.kr/xe/sepate>) に載ってます。

今西 でも、翻訳は載ってないでしょ。

安 いやいや、翻訳。

今西 載ってるんですか。

安 落星台研究所のホームページに載せてます。韓国版もありますよ。

石川 じゃあ本で出版されているのは、韓国語の。

安 ええ。

今西 原史料はかなり漢字が多いから、私でもある程度意味がとれるんだよ。多分こういう意味だろうなど。

安 原文はね、主に漢字とハングルなんですけれども、日本語も少し混ざってます。日本語の地名だとかに混じっています。

1.4 『日記』の特徴について

今西 あの本、裁判の記録の部分が面白くて読みやすいですね。あの、付録についている一番と二番の記事があるでしょ。あれが分かりやすいですよ。

安 あれ、裁判の記録じゃないんです。アメリカ連合軍情報局の審問記録なんです。連合軍が20名だったかな、20名の朝鮮人慰安婦と日本人業者2名を捕虜として捕まえて、そこで調査したものだった。それでその20名がね、日記を書いた著者と、一緒に43年7月10日に釜山港からビルマに向かって発った人なんです。だからその、審問記録とその日記を合わせてみますとね、ずいぶんその詳しいのが読みとれる。だからね、二つとも最近の記録じゃなく、同じ時期の記録なんです。だからずいぶん客観的な資料として読みとれる。ですから私、二つを付録として載せました。(それと) これはね、42年の日記がないんです。全部そろってますけども、これ(42年の日記)は抜けてます。

今西 そうそう、42年がないのは確かにもったいないですね。

安 これもったいない。そこがあったら、慰安婦がどのように徴集されたかと

ということが分かるんだけど。（ただ）どのように徴集されたかということが、その付録の、連合軍の審問記録の中にあるわけなんです。そこできちんと話されます。そこで「何人かが一緒に出発して」、という記録など、みんなあります。ですから、この日記をもって何が研究できるかといいますと、南方に連れられていった慰安婦たちの実態がはっきり分かる。中国はもうちょっと形が違うかもしれませんがね。南方に行った人たちはもう、確実なんです。これは「第4次慰安団」として動員されたんです。第4次ですから、第1次、第2次、第3次と当然あったんですね。この日記の中でも、慰安団という単語がただ1ヶ所しか出てこない。そのぐらいね、秘密にしたものがばれちゃって。

こういう慰安団があったってことは、藤永壮の研究があります（「戦時期朝鮮における「慰安婦」動員の「流言」「造言」をめぐって」松田利彦他編『地域社会から見る帝国日本と植民地—朝鮮・台湾・満洲』思文閣出版、2013年参照）。（ある人の「風聞」の中で、「慰安団がある」と。ある朝鮮人が二人、しゃべってる。そうしていると、警察に捕まって処罰されるんです。その処罰された記録が残ってますから、ぴったり合う。風聞は嘘じゃなかったと、事実だったということ。藤永さんは風聞を研究したんです。有用性のある資料としてね。

石川 警察に摘発された、流言飛語についての研究としてされたと言っております。日本国内でもそういう流言飛語、というか風聞としては伝わっています。

1.5 慰安所と軍の関与

安 慰安婦団というのはね、慰安婦団を発想したのが、日本軍大将の一人として、岡村寧次（1884～1966年。1932年に慰安婦家を創設）という人がいます。その人が、1937年、上海ですかね。その頃この人、長崎県知事に要請して慰安婦団を中国に招いたんです。その発想がそのまま、朝鮮で実現されたのが慰安団ではないでしょうかね。そうですから、慰安婦は、軍によって動員さ

れたということは間違いない。

今西 そうですね。

安 上海に、軍が指定した業者を遣って慰安所を作るようにしたという、それはあったんです。

今西 業者が勝手に前線には行けないですよ、前線まで連れて行くわけにはいけません。業者は、軍の許可がなくては行けるはずがないです。

安 それと、慰安所の類型は三つあるといわれています。一つは「軍直営」というもの。一つは「軍専用」というのがありまして、もう一つは、一般慰安所の中で、軍が指定して特に利用する優先権をもっているもの。(詳しくは吉見義明『従軍慰安婦』岩波書店、1996年、74頁参照。これによると「第1は軍直営で軍人と軍属専用の慰安所、第2は形式上は民間業者が経営するが、軍が管理統制する軍人・軍属専用慰安所、第3は軍が指定した慰安所で、一般人も利用するが、軍が特別の便宜を求める慰安所」)この三つがあるといっているんですけど。私がちょっと調べてみますとね、「軍専用」っていうのが主なものでして、残りの二つはね、一般的なものじゃないと、分かりました。専用というのは何かといいますと、「派遣軍」(或いはその上の方面軍)といっているんです。満州の派遣軍だとか、華北派遣軍だとか。派遣軍が計画を立てて、動員するんですね。動員して、もちろんその中に業者も中に入るんですけどもね。その時の業者というのは、御用請負業者なんです。勝手な業者とかじゃなくて。御用業者が経営を軍の代わりに行った。どうしてかといいますとね、慰安所というのはね、野戦軍兵站組織の一つ。それを今まであいまいにしていた。そうですから、慰安所というのは完全に軍の財産です。所有権はもちろん軍。御用経営者が管理するだけ。

石川 じゃあ組織としてはもう軍の一部としてやっていた。

安 そうそう。一番そのところをよく研究なさっている方が、永井和さんですね。きちんとした実証研究をやられて。もちろんね、研究者として有名な人は、中央大学の吉見義明さん。永井さんは論文1本しかないんですけど、非常にきちんとした実証研究。

今西 『二十世紀研究』（京都大学大学院文学研究科）の創刊号（「陸軍慰安所の創設と慰安婦募集に関する一考察」2000年）は、面白かったですけどね。

安 永井さんはね、日本軍の歴史をやっている人ですから、非常によく研究していますね。

2. 出生と家族について

今西 今日は慰安婦の話もそうなんですけど、先生ご自身のことと、戦後の韓国の様子の話とか、そういうことも少し聞かせていただけたら、ありがたいです。まず、先生のお生まれはいつですか。

安 昭和11（1936）年6月28日ですね。

今西 どちらでお生まれになったんですか。

安 慶^{キョンサン}尚南道、咸安郡^{ハマン}というところです。

今西 お父さんはどういう方だったんですか。

安 私のお父さんはね、農民だったんでしてね。その兄弟が3人でして。おじいさんが漢文学者だったんです。上の2人は漢文学者として教育しておいてね、1人は家庭を支えなければならぬんですから。うちのお父さんは農民でした。

今西 お母さんはどういう方だったんですか。

安 お母さんのうちはね、実はずいぶん金持ちだったね。うちのおじいさんが漢文学者として、いわゆる両班^{ヤンバン}だったといわれてます。身分がちょっと高かったんです。母親のところは、外交官（座首：品官の一つで郷吏の最高位）でね。洛東江^{ナクトンガン}（江原道の咸白山から釜山西側の南海に注ぐ河川。長さは約525キロで朝鮮半島の河川中、第二の長さ）を利用して米の貿易をやったみたいで。そこで金を儲けて、地主になっちゃってね。

今西 商人だったんですね。

安 元々商人だった。3千石か5千石か、その間だったと思いますよ。だからこの母親の兄弟たちはね、だいたい日本に留学しましてね。その中の1人が

誰かといいますと、^{カンジンチョル}姜晋哲（1917～91年）という^{コリョ}高麗大学の国史の先生がおられたんですけど。この方はね、慶応大学卒業だったんです。そのお兄さんが^{カンフソン}姜大成（早稲田大学卒。元、釜山の東亜大学学長）で、この2人が兄弟です。

今西 お父さんはどれくらいの土地を持っておられたんですか。

安 多い場合には、1町歩ちょっとぐらいだったと聞いてますね。だけれども兄弟が8人だったものですから。その中で5人が男でしてね。この8人がみんな教育を受けたんですね。その教育のために土地を少しずつ売っちゃって、最後まったくない。それで貧乏になっちゃったんです。それでどうしようもなくてね。私が高校の時、釜山に移住したんです。もう土地がなくなってしまっ

今西 先生は、男兄弟の中で何番目だったんですか。

安 男としては4番目ですね。5人兄弟で、兄弟の中で、長男は大学卒業してなくてね。戦前に、^{チンジュ}晋州というところがあります。小さい都市です。晋州の農林学校を卒業した。この後ろの下の4人は、2人は高麗大学卒業してね。2人はソウル大学卒。妹の1人は^{ソガン}西江大学卒業で、もう1人は^{イファ}梨花女子大学卒業。兄貴は、苦学だったんですね。上の2人の兄さんが高麗大学を卒業して、その中の1人が^{サムスン}三星の社員になったんです。今の三星ね。それでお金をちょっと稼いで。私は苦学をしませんでしたけど、その2人の兄貴が支えてくれたんです。私と私の弟はね、ソウル大学校です。兄貴が支えてくれましたから。私は楽に生活したんですよ（笑）。そんなに、経済的にはね、ちょっと貧乏だったんですけど、僕が食うくらいはあったね。上の2人は本当に苦学だった。

3. 40年代の話

3.1 40年代前期（解放前）

① 小学校時代(1)（教育制度）

今西 先生は、小学校はどちらだったんですか。

安 私の郷里はね、咸安郡伽耶面です。これは六伽耶の一つで、伽耶は咸安郡の中心地なんです。それで、伽耶国民学校ってところを出ました。44年に入っただけですけどね。

今西 先生は、昔の儒者の学校みたいところは全然行かれなかったんですか。

安 いえいえ、私は通ったことない。直接、国民学校に入っちゃったんですね。

石川 書堂ソダンですよ。

安 書堂には通ったことがないんです。韓国の教育制度は朝鮮総督府が設けたものでして、進学は段階的になっていました。段階を越えないと絶対、上に上がれない。そうなっていますから、学校の外でよく勉強して知識があったとしても、直接中学には行けない。もし小学校を卒業せずに中学校に行こうとしたら、何か、入学資格試験というのがあります。そこで受かったら、中学に入学する資格が得られると。そのような仕組みでした。これはまったく日本の制度だったんですから。

今西 小学校の教育は完全に日本語で、先生は日本人の教師だったんですか。

安 私はね、44年に小学校入っただけですけどね。その時もう既に、朝鮮語しゃべったら処罰されました。日本語でしゃべらなくちゃダメでした。先生は朝鮮人でしたね。その当時は、うちのお姉さんもね、小学校卒業して、兄貴もみんな学校通ってましたから。うちでは、日本語で生活できるくらい日本語ができてね。いっぱい話しましたね。日本語、親は通じませんでしたから。

今西 お父さんとお母さんはそうですか。ハングルだけですか。

安 お父さんとお母さんは韓国語でしゃべって、兄弟の間では日本語でしゃべる。しゃべるくらい。だからね、私らは、小学校入る前からもう日本語少し

知ってました。ですから、小学校、国民学校入ったらもう、日本語で生活できるくらいだけど、うっかり朝鮮語をしゃべっちゃうんですね。その時はもう、処罰されるんですね。

② 小学校時代(2) (学徒動員, 供出制度)

今西 学校の教育内容っていうのはどうなんですか。もう戦争の末期ですけども。

安 いや、あれがもう、小学校1年か2年くらいでしたから、もう教育の中身がどんなもんか、ちょっと覚えてないんですけどもね。

今西 国語(日本語)はどうでしたか。「進め進め兵隊進め」とか。

安 あんまり国語は覚えてないし、はっきり。やっぱり、小学校でも少し習ったんでしょうけども、そんなに勉強した覚えは今ね、頭にないんです。その時、勉強もしたんですけども、総動員の時でしょ。そうですから、学徒動員で動員されたりね。

今西 小学生も動員するんですか。学徒動員はもうちょっと上じゃないんですか。

安 いや、小学校もみんな、その時はね、むちゃくちゃ!小学校も、普通の農民もね、みんな動員されるんですね。モンペという、女性のね。そんなのみんな着て動員される。だからね、ものすごく社会を組織(的に動員)してね。今、文献を読んでも、そんな文献もたくさんありますけれどね。実際私もね、ずいぶん動員されましたね。山に行って、薪を拾って。

今西 そういう仕事をさせられたんですか。

安 でなければ、日本は特に油がなかったんでしょ。だから松の木から油をとって、そんな作業もやってましたね。勉強した覚えもあるんだけど、動員されて、ずいぶん山に上がったという、そんな感じが強いんですね。動員されて、きつい仕事というのは別にないんだけど、なんとか遠いところまで歩いていたり、肩に重いもの乗せたり、やりました。それとね、もう一つ記憶に残ってるのは、44年くらいだと思うんだけど、44年、45年は本当にね!食

べ物がなくてね、腹減っちゃってね！どうしようもない。

今西 日本本土でもそうですからね。

安 文献を読んでみますと、朝鮮にいる日本人は、日本にいる日本人よりましだと。そんな、記録もたくさん残ってます。朝鮮人はね、うちは、どのくらい収穫あったかなあ。60石くらいあったんですかね。そこからね、税金を出したり。小作料を地主がとらなくて、それをね、国家がとったんです。国家がとって、地主に配った。その制度に変わったんです。ですから、国家が税金と小作料を供出させるでしょ。

今西 ええ、供出制度ですね。

安 供出したんですね。約90%くらい。まあ90%以上かもしれませんね。私の記憶ではね。

今西 ほとんど全部出さないといけない。

安 収穫してね、その直後は、そこにいっぱい、粃ですか。それがいっぱい。その翌年の春でしたかね。2石か、3石か、それしかないんです。みんな出してしまっただけでね。それで、農民たちは、みんなもう出してしまったら、食べるものがないんだから、2石か、3石か、そのくらいはどこかね、隠しておくんですね。

今西 闇米ですね。

安 ええ。それを探し出すためにね、面の役人だとか必死だったんですってね。まあ、そんな時期だったんです。うちはちょっとマシですから、なんとかあったんですけど。貧乏人たちは本当に食べ物なくてね。子供はね、アフリカで食べ物なくて、死ぬ人いるでしょ。

今西 栄養失調ですね。お腹だけ出てきて。

安 1人か2人くらい、そんな人たちが出てきましてね。

今西 餓死者が出たわけですね。

安 私の目で見ましたから。だから戦争がもうちょっと、長引きましたらね、私もどうなったか分らない。ああ、腹減って腹減ってどうしようもない！そんなでしたね。

3.2 40年代中期（解放直後）

① 解放直後の様子と邑の日本人について

今西 それで、8月15日のいわゆる「光復」、朝鮮にとっての「解放」ですね。日本では「敗戦」になるんですけど。その時、玉音放送なんかは、やってたんですか。

安 いや、当時はうちの農村までは、ラジオだとかそんなものなかったんですから、聞くことできないんですね。とりあえずもう、電気も入らなかったんですから。川で泳いでますとね、何か、訓練する人たちがね、当時訓練する時、本当の銃じゃなくてね、木銃ですか。それを持って訓練するんです。本当の銃は…。

今西 銃はないでしょう、戦地でも足りないですから。

安 そうですか。それを持って、「わーっ」と「解放だ」とね。うちの村にも駆け込んでくるんですよ。「解放」って何か、分かるはずがないでしょ。ちょっと、邑（邑とは郡県、面レベルの行政単位、町など、複数の意味で使用される）に出て行ってみますとね。人がたくさん集まっててね、もう「解放だ」って。そこで韓国の「ケンガリ」（韓国の民俗音楽で使用する、真鍮製の打楽器）ってあるでしょ。「ジン」（同様に、ドラのような打楽器）だとかね、それを「わあーっ」と鳴らしながら、やったんですよ。その時にちょうど、伽耶の邑にはね、アスファルトが敷かれた。戦争の時期だと思いますね。それは記憶がはっきりしないんですけど、アメリカ人が入ってアスファルトができたか、戦時中にアスファルトができたか、それははっきりしないんですけど。人がたくさん集まってね、解放の喜び。

今西 その村には日本人はいたんですか。全然いなかったですか。

安 ええ、全然、いませんでした。ただ、咸安郡には邑が二つありまして、咸安邑には日本人がずいぶん住まれていたと聞いています。

今西 じゃあ日本人が逃げて行くところか、帰るところか、見てないわけですね。

安 いや、邑にはね、商業やってる日本人は何戸かあった。その邑で商業やっ

てる人の中で、「久保」っていう人がいましてね。うちの母親と久保家の奥さんと親しい関係でしてね。非常に。

今西 仲良くやってた。

安 うちの母親がね、私を連れて、久保さんの店に、行ったりしたんですから、記憶に残ってますね。二人は親しい関係で、いつも私に「いいですよ」と、説明したり。その人はね、割合、伽耶の邑では評判だったんで、うちだけじゃなくて、他の村の人もね、その久保さんを記憶している人がいますね。私の先輩の中でもね、そんな記憶を思い出して、最近も話した人がいます。「ああ、久保さん、いらっしゃった」と。

今西 その久保さんというのは、どこから来られた方とか覚えておられますか。

安 それは全然分かりません。ですから、解放直後は伽耶の邑ではね、日本人でひどいことした人は、いなかったんですね。むしろ、日本人が日本に帰るときね、歓送ですか、そういうのやったんです。

今西 子供時代には、日本人が朝鮮人とぶつかりあってるところとか、あんまり見たことなかったんですね。

安 私が直接見たことはないんですね。

② 教育の変化について(1)

今西 戦後は学校が変わって、名前は国民学校のままだったですけど、国民学校にずっと行っておられたわけですね。教育内容はがらっと、ずいぶん変わるわけですね。日本語をまず使わなくなりますしね。

安 戦後ね、教育の中身で変わったことの記憶は何かといいますと、やっぱり戦前は日本の民族主義だとか、日本的なもの。それを強調していましてね。その中で一つ記憶に残ってるのは、二宮尊徳、当時は二宮金次郎といっていましたけど。二宮金次郎の石像、薪を背負って。そういうのが小学校の教務室の前の庭にね、「ほんっ」と建ってました。

今西 日本のどこの小学校にも建ってましたね。

安 そうですか。それで、小学校に入る時ね、東の方に神社があります。神社

に入る時は必ず、村の子供と「だあーっ」と並んでね、「まわれー右！」
といてね、挨拶するんです、神殿に向かってね。

今西 そこに奉安殿はあったんですか。

安 神社と記憶しているんですが、奉安殿だったかも知れません。その中に何が
あったかということは、記憶がないんですけど。

今西 日本の小学校だと奉安殿というのがあって、そこに明治天皇の写真、御
真影と、教育勅語がだいたい入っていて、通る時に最敬礼するという、そう
いう形をとるんですけど。

安 ええ、敬礼したりしたんですけど、やっぱり何をやったかということまで
は、覚えてない。

今西 多分奉安殿だと思いますけどね。どこでも作ったと思うんですけどね。

安 そこでね、何が変わったかといいますと、教育の雰囲気ね、アメリカ式
に染まったんですね。「自由」だということ。

今西 デモクラシー、民主主義という。

安 それとね、雰囲気が違うんですね。やっぱり、戦前は「規則正しい、人間
の生活」だとかね。何か緊張の中で生活しなければという。小学校、学生の
時もそうでしたけど。戦後は非常に自由にね、秩序がないといたら、秩序
がなかったといわれるかもしれませんが、自由になったということ。そ
れともう一つ変わったのはね、クラスが急に増えましてね。元々は一学年の
クラスが三つしかなかったんですけどね。戦後、クラスが七つに増えちゃっ
たんです。クラスが急増した原因は、戦前の講習会などが国民学校に合併さ
れたことと、^{イスンマン}李承晩の国民教育の強調があったのではないかと思います。そ
の二つが、変わったという感じがしますね。

③ アメリカ軍の有無、親日派への処遇

今西 日本みたいにアメリカ兵が直接村へ来るってことはなかったんですか。

安 アメリカ兵が村まで来たのは、やっぱり朝鮮戦争の時ですね。その前まで
は全然そんなことはなかったんです。村まで入ったのは、やっぱり朝鮮戦争

の時。私の村も戦地だったんですから。その時はアメリカ兵がたくさん村に入って。

今西 日本だとアメリカの単独占領という形をとるので、日本の場合は町村をまわったんですけどね。

安 そうだったんですか。

今西 占領軍は、だいたい市町村、役場を巡回して、駐留軍としてやってきますからね。

安 それとは違うかな、という感じがします。韓国の場合はね、邑くらいには道路があるんですよ。アメリカ軍のジープですか。それが通ったという感じはしますね。それくらいでして、何か、地方の町に駐屯したという記憶はほとんどないですね。

今西 日本の場合はもう教育改革から全部、アメリカが主導するから、学校にも直接乗り込んで来たり、調査に来たり、いっぱいいますけどね。

安 いや、私の記憶では、学校で米軍見たとか、そんな感じはないですね。

今西 占領によって古い指導者たちが変わるってことはなかったんですか。日本軍に協力した人たちってというのはどうだったんですか。

安 日本人に協力したっていっても、特にね、迫害されたり、そんなことはね（なかった）。当時、面だとか郡でね、何人かは戦前植民地の時に酷いことやったという、批判というのはありました。それも私、聞いた覚えがありますけどもね。そのくらいはあったんですけども、特に「あの人は親日派だ」とかなんとかね、そんな話は出てこなかったです。もしね、その時の親日派が誰かと探し出すとね、みんな親日派ですからね（笑）。私の感じではそうなんですよ。だから植民地期に役人として酷いことをやったと、評判が悪い人間だとかそんな人はいましたけどね。特に、聞き出して迫害したり、探したり、そういうことは記憶にないんですね。

今西 学校の先生でクビになったり、代わったりとか、そういう人はいなかったわけですか。

安 記憶にないんです。むしろね、先生が足りなくて。

今西 大変ですね。そりゃクラスがそんだけ増えたら足りない(笑)。日本だったら、戦犯だとか、辞めさせられるって人が結構いたんですけどね。

安 ああ、そんな記憶はないんですね。

3.3 40年代後期(解放後)

① 教育の変化について(2)

今西 アメリカ式の教育が入ってきて、デモクラシーということが言われるようになったわけですね。

安 教育の中身は今ちょっと頭にはないんですけどね。やっぱり、日帝(朝鮮植民地)時代の教育と、新しいアメリカ式の教育は混ざってる感じじゃなかったんですかね。

今西 そうですか、まだ。

安 九九だとかね、そんなのは、日本式ですね。

今西 算数はあんまり変わらないでしょうけどね。

安 その頃は日本式でした。やっぱり李承晩が、アメリカの文化を取り入れて、「自由」という概念ですか。それはずいぶん入りましたね。それはアメリカ式じゃなかったかな。

今西 教科書はどうしてたんですか。例えば日本だと、軍国主義に関わる文は全部生徒自身が墨で塗って、消して、それで教科書を使っていました。

安 こっちはね、教科書がどうだったか今、はっきり憶えがないんですけど、みんなハンゲルに変わっちゃったでしょ。だから日本の教科書はもう、ほとんど使わなかったんですけどね。小学校高学年の人たちだったかね、中学卒業の人たちは、ずいぶん戦後も日本の書物をもって、勉強したりやりました。そうしないとね、読む物、本がないんですから。私はせいぜい仮名くらい読めるところだね、もう日本の教育が終わってしまったんです。私は、日本の書物をほとんど読んだことないんですね。ですから、大学、大学院に進学して「韓国近代経済史を専門にしようかな」と思ってね。その時も、韓国語の書物だけではね、研究できないんですよ。それと、英語も少し習ったんです

けど、読むには楽ではないでしょ。それと韓国近代史ですから。そうしますと日本語覚えなきゃならないんだから、日本語ずっと覚えたんですね。十日、勉強したらすぐね、日本語スラスラっと！読めてしまいました。

今西 天才ですね。

安 周りの人間からも、「おお、その頃天才だった」と言われました。私の先輩が言ったんですけど。天才だとかなんとか、そんなこと全然なくて、子供の時の教育ね。これ大きいな！という感じです。仮名を覚えて、漢字はもともと知ってるでしょ。それと戦前、日本語で生活したこともありますから。すぐね「ばあーっ」と読めるようになっちゃって（笑）。私の教え子たちで、学生運動やってる人たちはずいぶん、マルクス主義だとかそんなもの、日本の書物で読まなくちゃいけなかった。

今西 マルクス主義が勉強できないですからね。

安 ええ。その私が教えた学生、私よりもっと頭いい人たちなんだけど、最低3ヶ月か5ヶ月くらい経たないと、日本語読むことができなかったんですよ。

今西 3ヶ月、5ヶ月でもすごいですよ（笑）。

安 漢字で教育受けたんですから、私はね。十日で「ばあーっ」と。その差が、どこにあったかという、それやっぱね、小学校2年まで通ったということね。それと、うちでは、日本語で生活したっていう。

今西 子供の頃に日本語習ってたっていうのは、大きいですよ。

② 海軍少年学校時代

今西 小学校は卒業されて、すぐ中学校に行かれたんですか。

安 いやいや、私はね、貧しい家庭だったんですから、中学校まで入のお金がなかったんです。ですから、どうしようもなく、小学校6年の後半期にね、海軍少年団というのがありましてね。それは公立だとか国立じゃなくて、当時は私立だったんでしてね。

今西 私立で作ったんですか。

安 ええ、日本の制度を学んでね。日本から教育を受けた人が、そこに（教官

として)入ったんですね。入って、6ヶ月くらい少年団に通ったんですかね。そこで朝鮮戦争が勃発してしまって。

今西 海軍少年団ってというのはどんな教育をするところなんですか。出たら本当に海軍の兵隊になるんですか。

安 そうですね。そこを卒業したら海軍の兵隊になるとか、そんな話でしたけど。それがね、私が入って6ヶ月経って、その海軍少年団が朝鮮戦争で解散してしまっただけです。それで、もうどうしようもなくて。釜山でね。

今西 釜山にあったんですか。その少年団はどういう人が作ったんですか。

安 いや、分からないんだけどね、やっぱり戦前にね、そのあたりの教育を受けた人たちじゃなかったんですかね。それとその当時ね、私の2番目の兄貴が、釜山の慶尚南道の道庁に勤めたんです。(彼は)小学校、中学校3年までしか、教育を受けてなかったんですけど、製図の技術がありまして。道庁の公務員として勤めていたんです。そんな関係もあって、私、少年団に入っただけでね。

以下、次号へ